

## 生きることと哲学

松田幸子

私たちは考えながら生きています。どのように毎日の暮しを立てるか、もつと楽しい生き方はないか、もつと生き甲斐のある過ごし方はできないかと考えながら生きています。もちろん何も考えないでただ生きていくだけという人もあるだろう。これもひとつの生き方の表現であって、生き方に伴う考え方である。

このような生き方・考え方を、より人間らしいものにするために、哲学的考え方を知るのも意義あることであろう。哲学とは、ギリシアの昔から「人間とは何か」「私自身とは何か」と問い続けてきた学問であるから。ここでは特にカール・ヤスパース (Karl Jaspers 1883-1969) の哲学を取扱うことにする。まずヤスパースの哲学について語ろうとする時には、彼の妻ゲルトルトについて触れなくてはならない。ヤスパースと妻ゲルトルトとの出会いと二人の人間関係は、彼の哲学に大きな影響を与えている。

ヤスパース夫妻の出会いには、一九〇七年、ドイツのネッカー河のほとりの小さな古い大学の町ハイデルベルクであった。当時ヤスパースは医学生であったが、自己自身の本来的な生き方は何かと求めて、哲学

することに深い関心を持っていた。他方、ゲルトルートも新しい生き方を見つげるために大学で勉強しようとしていた。彼女はユダヤ人であった。彼女の姉は精神病にかかっており、その友人の一人は自殺をし、このような暗い運命を背負って青春を生きてきたゲルトルートは、その暗さを自らの手で断ち切るうとしていたのであった。それゆえ、二人を結びつけたのは哲学への情熱であり、このとき以来その情熱はますます高まり、二人の上に運命的に働きかけたと思像できる。「ゲルトルートは私が忘れすぎないよう気を配り私が忘れがちな人間問題に関して、私のなすべきことを思い出させる。彼女は、私が書くものを全部読んで検討する。彼女がいることによって私は、精神の世界や単なる思考に沈みこまないだけの衝迫がよびさまされる。それどころか更に私は、もし私の哲学がある深さを持っているとすれば、その深みはゲルトルートなしには決して到達されなかつただろうと信じている。」とヤスパースはゲルトルートとの出会いとその交わりにおいて、自分が哲学的関心の中へと深く入っていった事を告白している。

後に、ドイツ国内で暴力をふるったナチスの独裁体制の中で、二人の夫婦関係が危険にさらされることがあった。当時のドイツはユダヤ人迫害の時代であった。ヤスパースは、ナチスから、ユダヤ人の妻と離婚するか、ハイデルベルクの大学での哲学部の正教授の職を捨てるかと決断を迫られたが、彼は教授職を捨てる道を選んだのである。彼にとっては、妻と離婚することは、彼自身の生も、彼のすべての著作も意味を失うと思えたからである。

## 1 人間知の限界

ヤスパースの哲学的人間観は、ギリシア悲劇の『オイディプス』（ソフォクレス作）解釈にもみられる。

### 『オイディプス』物語

オイディプスは、テーベの王子として生まれたが、「父を殺し母と結ばれるであろう」という恐ろしい運命が神託されたので、父王はオイディプスを家来に殺すように命じた。しかし、家来は殺すに忍びないのうな恐ろしい事態が起こるのを避けるため、父（実は養父）のもとを去って旅に出た。その途中で出会った人と言い争い、殺してしまうが、彼はその人が自分の実の父であったとは知らない。

やがて怪物に悩まされていたテーベの国へやってきたオイディプスは、怪物を退治しその国を苦難から解放した。そして約束に従って国王となり、前王ライオスの妻（実は実母）と結婚し、二男二女をもうけ、善政をしいて人民より名君として仰がれていた。しかしこの幸運は幻想の上に建てられたものであったことがわかってくる。やがてこの国に悪疫がはやり、その原因を追求すると、前王を殺した者が国内にいる

からである。犯人を探して国外へ追放しなければならぬという神託を受けたオイディプスは、その追求の過程で自分の犯した恐ろしいことを知る。オイディプスはあまりの恐ろしさに死にたいとさえ思うが「覆いをとってこの目で見なければならぬ」と探求を続けてすべての真相を知る。自らの意志によって事実が明白になった時、オイディプスは既に自害していた后（生みの母でもある）の衣装から黄金の留金はずして自分の眼球をくりぬき、「おのれの不幸、おのれの悪業を見るのもこれが最後だ。見てはならないものを見、おれが知りたいと願っていた人を見分けることのできなかつたお前らは今後は暗闇のうちにあるであろう」という。更に次のように歎く。「この眼球をえぐつたのは誰でもない、不幸なこのおれの手だ。何とて目あきである必要がある。見えたとして何一つ楽しいものが見えぬおれに。」

### 『オイディプス』解釈

ヤスパースはこの悲劇を高く評価する。この物語りは自分の運命との闘いにおける悲劇である。無条件に知を望み、真理を探求するオイディプスがそれゆえにまた無条件に自らの悲劇を引き受けて挫折することとは、人間として誠実な生き方なのである。それは彼が運命に敗北したことではなく、無条件に挫折を引き受けたことによって自分の運命に打ち勝つたことになる。この見解から、ヤスパースはオイディプスに次の言葉を捧げている。

「知と運命とによって不幸なオイディプスに、神の意志によって一つの新しい価値がつけ加わる。オイディプスの死は彼が安置されている国土に祝福をもたらすものである。」

彼は人間の限界に突き当たりながら、その絶望の中で自分をごまかすことなく誠実に生きようとしたのである。オイディプスが「覆いをとってこの目で見なければならぬ」といった彼の真理へ向うあの勇敢さの中に、ヤスパースはオイディプスという人間の偉大さを見てとるのである。

ヤスパース哲学では人間の限界状況という事柄を重視する。その限界状況に直面したときの人間のとる行動を問題にしている。ヤスパースは「目をみひらいて限界状況の中に入っていくことによって人間は自分自身となる」と云っている。彼が個別的限界状況と指摘するものは、争い、悩み、責め、死などである。オイディプスは、自らは知らずに行つた恐しいことに対し責めを負い、それを誠実に引き受け、積極的に感じとつたのである。

## 2 交わりと自己発見

ごく些細な言動をしながら生きている平凡な生活の中でも、私たちはしばしば「本当の私はこんなものではない」とか「真実の本来の自分はもっとまじな自分だ」という意識におそわれることがある。私たちは、今ここでこのように語り行動している自分とは別に、或いは背後に、より高次でより真実の自己、より深くより本来的な自己を、何か次元を異にしたものとして感じとることができぬ。

たとえば、私たちが自分のうちに、現実の自分を責める良心の声をきき「……すべきだ、或いはすべきだった」と思う場合がそうである。現実の自己と、責める自己のうち、どちらが本来的で真実の自己であるかといえばそれは後者である。ヤスパースは本来的自己を実存と呼ぶが、それは決して、ここにあるがままに現象している自分ではない。実存には高い次元での未来の可能性が含まれている。

そのような実存は、ヤスパースによれば、実存的交わりの中ではじめて明らかになってゆくものである。

## 社交的交際

社交的交際では、本来的自己、すなわち可能的な実存を明らかにできないとヤスパースは述べている。しかし人間関係においては大事な事柄であるので、実存的交わりにすすむ前に簡単に触れておく。

一般に人間が共存して生活するための社交的交際がある。いかなる個人もの<sup>が</sup>れることができるができない交際の仕方、たとえば世間的な礼儀作法がある。交際における節度やもの柔らかさ、相手の気持ちをそこなわせるような事柄の話題を避けること、押しつけがましきのない思いやりあふれるふるまいをすること、自分の個人的な価値を他人に認めさせようとする尊大なやり方をせず、他人のことなどどうでもよいと思つてないような態度をとること、また人々が他人同志で気心が知れないような時は、お互に不信の念を持つて対しあっているのであるから、このような不信の表示や、その場に誰もいないかのように、公の場所

無遠慮に振舞わないこと、などが今日の世間的な礼儀作法である。これらは交際をなめらかにする為に大いに役立つが、表面的なものであるから人間を真の交わり（実存的交わり）へと導かない。また社交的交際にあつては社会的ルールに従っているだけでなく、他人によく思われるような自分・周囲の人々の期待どうりの私になろうとする傾向がある。他人から思われる通りの自分を、他人と共に自分としても当然のこととして行っているかぎり、私は世間から親しみのある者として受け入れられる。しかし、本来的自己は隠されたままである。

### 実存的交わり

ヤスパースは自分自身というものは、自分にとつても完全には捉えられないものであると述べている。自分というものの諸々の側面は客観的に示すことができる。私の身体の特徴、私の社会的地位、私の業績、過去の回想から得られる私というものの、私の性格などである。しかし自分自身というものは、それらの事で完全にいつくせるものではない。従つて私の実存も決して外側からとらえられないが、私が考えたり、選択し、決断する場合の拠り所となるものである。実存がそのように客体的でなく主体的であり、思惟や行動の根源であるということは、実存は対象的にとらえられるままの自己ではないということである。

例えば人生を送っていく上で、私は自分の可能性をいろいろと考え、状況に応じて行爲する。この行爲

の主人公となるのが私自身であり、真実の私そのものという私の実存である。そのような可能性をもった私の実存とは他の誰とも置き替えることのできないこの世でたった一人の私である。それゆえ、実存とは、本来的自己をもとめて、つねに自分のあり方と生き方を選択し、決断しながら、自己自身を実現してゆく過程の中のみ存在しうるものである。

ところで被造物としての私たちは、自分を創造したのではない。したがって実存が選択と決断によって実現してゆく可能性も、実は自分を越えたもの——超越者 (Transzendenz・独)——から贈られたものである。「自己存在の深みは、その前に私が立っているところの超越者の中にその基準をもっている」のである。

実存的交わりとは、このような意味での実存と他者のもう一つの実存との交わりである。この実存的交わりを成り立たせる大切な要素として、交わりを持つ人の「孤独」があるとヤスパースは云う。すなわち自己自身でありたいと願うものは、何よりもまず自己自身で立っていようとするものであるから、交わりがどんなに深いものでもあっても、自分の独自性を守って、他の人と雷同することなく留りたいと強く思うものである。それがここでの孤独の意味であって、孤立とは異なるものである。

実存的交わりは、互いに自己自身であろうとする人間相互の交わりを通じて自己自身の最も内なる深みが示されて明らかになると同時に、相手の最も深みをも聞きとることである。この実存的交わりを可能にする根源力としては愛が考えられる。この愛は盲目的な愛ではなく、どこまでも見通せる眼をもった、相手の可能性をはっきりと正しく見抜く愛 (理性的愛) である。また自分の可能性をみい出そうと真剣に考



えている相手との出会いをみつけ出すものである。

そのような愛は、自己の可能性を問題にすると同時に相手の可能性も問題にする。そしてどこ迄でもお互いに可能性を伸ばそうと刺激し合い、愛するがゆえに自分の本来の姿を苛責なく相手に明らかにしておくことができるのであり、愛するがゆえに私は相手の実存の深みからの声をききとり、その魂にふれてお互に自己自身となるように努力するのである。

またこの愛は、本来的自己になる為の努力を怠っている相手を強く問題視するような闘う愛である。その闘いの中ではお互い優越性や勝利を欲してはならないし、社交的交際のような打算的遠慮（忠告して悪者になるのを恐れるようなもの）もしてはならない。それとは逆に相手への信頼を前提にして、それぞれの生き方、自分の可能性について論争するのである。このような闘う愛が生れるのは同一水準の二人の間である。同一水準とは一切の力を出して本来的自己を求めていることよってつくられる。それは実存的に生きたいという熱意において同等であるということである。このような実存的交わりは、本来的自己になろうとする者どうしが、それを明らかにしてゆく動的過程であって決して完結されるものではない。

### 実存的交わりの具体的例

ヤスパース夫妻の交わりは、正にその一つの例である。ヤスパースの妻ゲルトルートは、出会った頃は

まだ医学生であったヤスパースの哲学への才能を見抜き、哲学者ヤスパースの出現に大いに役立っているのである。もともと病弱だったヤスパースが、一応の成果があがったところで研究の手をゆるめようとする、励ましながら先へ先へと押し進めるように彼を促したのもゲルトルートであった。

そのヤスパースが実存的教育論を述べているが、そこにも実存的交わりの具体的例がみられる。

ヤスパースは、社会的、歴史的制約を度外視して、事象的な教育の根本形態として次の三つをあげる。

a スコラの教育……この教育で、教師は伝統的な教材を使って単に知識を伝達するだけで、教師は創造的な研究者ではない。従って教師は非個性的で、他の誰かによって代替できる単なる仲介者である。

b マイスター的教育（師匠による教育）……ここでは、教師の人格への畏敬と愛は崇拜に似ている。かけがえのない唯一人として受けとられる教師と、弟子の上下関係は、隷従的な性質をもっている。教師の權威は驚歎すべき力をもっている。

c ソクラテス的教育……ここでは教師と弟子の関係が平等である。すなわち教師と弟子とは知識、才能、記憶力、経験、社会的地位は異なっているが、一切の力を出し合って学問研究に従事している点で同等の立場におり、連帯意識を持ちながら論争しながら研究をすすめていくのである。この場合、大学での学問研究が念頭におかれている。

この最後の場合の教育法は問答法であり、それを通して弟子に内在する可能性を弟子自身に自覚させるのである。弟子はおのずから教師を尊敬し、我が師と仰ごうとするが、これは教師によって拒否される。

突き放して彼自身に立ち帰らせるソクラテスの教師は、まず弟子に自分の独自性を守ることを教え、同時に仰ぐべきものは人間の無知の知を通して自覚される根源として真なるもの、超越者のみであることを教える。学問研究の道は、教師と弟子の間での「愛しながらの闘い」(Liebender Kampf・独)の場でもある。学問研究の場では、教師は弟子のために存在するのでなくて、両者は学問研究のために存在する。お互に愛し尊敬すればこそ相手がその本分を怠らないように励ましあい、切磋琢磨するのである。このようなソクラテスの教師と弟子と交わりの仕方、すなわち愛しながらの闘いはまさに実存的交わりである。

このような実存的交わりを通して、本来的自己は姿を現わしてくるのであり、人は私がどんな人間として生れたかを自覚するのである。

#### 参考文献

Von der Wahrheit (1947) Karl Jaspers

ヤスパース著 『真理について』小倉志祥・松田幸子訳 一九八五 理想社

